

平成21～24年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書
Report of Grant-in-Aid for Scientific Research(A) for 2009～2012

ナガラ原東貝塚の研究

5世紀から7世紀前半の沖縄伊江島

Studies on the Nagarabaru-Higashi shellmound
IEJIMA, Okinawa, during the 5th century through
first half of 7th century

2013

研究代表者 木下尚子
KINOSHITA Naoko, Head of Project
熊本大学文学部
Kumamoto University

序 文

沖縄県伊江島は、本島の本部半島西方にある。サンゴ礁に囲まれたこの島の南岸にあるナガラ原東貝塚において、私たちは1998年から2002年まで、および2009年から2011年までの合計8年間にわたって発掘調査をおこなった。熊本大学文学部考古学研究室の実習発掘調査としての実施であるが、ここまで継続できたのは地元の皆様の温かいご援助があつてのことである。海辺の木麻黄の下で、学生たちが遺物を掘り出して目を輝かせ図面の作成や撮影に汗しつつ成長していく姿を目で追つたのも、懐かしい思い出となつた。

本書は、ナガラ原東貝塚においてこれまでに実施してきた発掘調査成果の最終報告書である。発掘調査の成果については、年次ごとの報告書でもれなく公表してきたので、これらを集めれば遺跡の内容は了解されるのであるが、さらに本書を作成しようと思ったのは、次の二つの理由による。

一つは、年ごとの成果を一書にまとめ、調査によって明らかにされた遺跡全体の内容を包括的かつ簡明に示す必要を感じたことである。いま一つは、2002年以降の沖縄考古学の進展に応じ、ナガラ原東貝塚のもつ学術的な意味をさらに深く問う必要を感じたからである。さいわい2009年に日本学術振興会の科学研究費を得ることができ、関連分野の研究者に協力を仰いで共同研究を立ちあげた。こうして改めてナガラ原東貝塚に向きあい、発掘調査では包含層の地山までの掘り下げをおこない、併行してナガラ原東貝塚にかんする諸問題（包含層の形成過程、土器編年、貝交易、生業の復元）について検討を重ねた。

第Ⅰ部は8回の発掘調査成果をまとめたものであり、第Ⅱ部は共同研究者による研究報告、第Ⅲ部はこれらの総括である。200m²ほどのささやかな面積の発掘調査ではあつたが、遺跡が私たちに語るものはとても多い。

本書を編むにあたり、共同研究者各位には多くのご教示とご協力を賜り、第2次調査フィールドマスターの谷直子さんには編集全般にわたりご助力いただいた。鐘ヶ江賢二氏には今回とくに土器の胎土分析をお願いしご快諾いただいた。村田（旧姓前田）知聖さんには2002年調査のデータ復元にご尽力いただき、考古学研究室の学生諸氏には日常の作業に協力いただいた。あわせて深く感謝申し上げます。

2013年3月

木下尚子

例 言

1. 本書は、平成21～24年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究課題番号21242027「琉球列島先史時代後半期における生業と交易にかんする実証的研究」（研究代表者 木下尚子）の研究成果報告書である。
2. 本書は3部構成をなす。第Ⅰ部は発掘調査報告の部であり、沖縄県国頭郡伊江村字川平1061-1・1062-1・1071-1番地所在のナガラ原東貝塚において、1998年から2002年、ならびに2009年から2011年の計8年にわたって実施した発掘調査とその出土遺物についての報告である。第Ⅱ部は論考の部であり、2009年から2011年の発掘調査と併行して実施した科学研究費による共同研究の成果である。第Ⅲ部は総括の部で、第Ⅰ部と第Ⅱ部にもとづいて遺跡の内容を総括し、その考古学的意義を明らかにしようとするものである。
3. 本報告書は、熊本大学文学部考古学研究室の実習調査（以下「実習調査」）ならびに科学研究費による以下の共同研究成果を継承するものである。
 - ・藤江 望編1999「Ⅰナガラ原東貝塚」『考古学研究室報告』第34集 熊本大学文学部考古学研究室
 - ・谷 直子編2000「Ⅰナガラ原東貝塚2」『考古学研究室報告』第35集 熊本大学文学部考古学研究室
 - ・新里亮人編2001「Ⅰナガラ原東貝塚3」『考古学研究室報告』第36集 熊本大学文学部考古学研究室
 - ・木村龍生編2002「Ⅰナガラ原東貝塚4」『考古学研究室報告』第37集 熊本大学文学部考古学研究室
 - ・檀 佳克編2003「Ⅰナガラ原東貝塚5」『考古学研究室報告』第38集 熊本大学文学部考古学研究室
 - ・高松あゆみ・弘中正芳編2010「ナガラ原東貝塚6」『考古学研究室報告』第45集 熊本大学考古学研究室
 - ・松崎友理編2011「ナガラ原東貝塚7」『考古学研究室報告』第46集 熊本大学考古学研究室
 - ・柴田 亮編2012「ナガラ原東貝塚8」『考古学研究室報告』第47集 熊本大学考古学研究室
 - ・木下尚子編2003「先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－ 改訂版」平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究課題番号11410107「6～7世紀の琉球列島における国家形成過程解明にむけた実証的研究」（研究代表者 木下尚子）
 - ・木下尚子編2006「先史琉球の生業と交易2－奄美・沖縄の発掘調査から－」平成14～17年度科学研究費補助金基盤研究（A）（2）研究課題番号14201043「琉球列島の農耕社会形成過程の解明に向けた実証的研究－5～7世紀を中心に－」（研究代表者 木下尚子）
4. 第Ⅰ部は、考古学研究室による8次の報告内容を編集したものである。編集にあたり、『考古学研究室報告』の年次間の重複等を整理し、全体的な表現の統一と内容の総合をはかった。具体的には以下のとおりである。
 - ・発掘調査区の層序については、最終的な図面を掲載している。
 - ・遺物ごとに、出土レベルを反映させた出土状況図を新たに作成した。
 - ・植物遺体、脊椎動物遺体、貝類遺体の分析については、8次調査分のデータを集約し、年ごとのコメントを一つにまとめている。
 - ・Ⅳ上層とⅣ下層は、Ⅳ層に統一し、二つを区別する必要の生じた場合に限り、Ⅳ上層をⅣ層上部、Ⅳ下層をⅣ層下部と表現した。
5. 第Ⅰ部では、『考古学研究室報告』刊行後に認識された事実や、不確実な部分について再確認と修正をおこなっている。具体的には以下のとおりである。
 - ・シャコガイ類（シラナミ・ヒメジャコ）については、分類基準を再度確認して改めて分類をおこなった。
 - ・出土遺物実測図は原則として『考古学研究室報告』に掲載したものを再録しているが、図95（貝符等実測図）については、山野ケン陽次郎氏による実測図を掲載した。

- ・第5次調査において、植物遺体用土壌サンプリングに含まれていたIV層の土器の報告を加えている。
 - ・出土遺物実測図の縮尺は、原則として1/3に統一した。
6. 第I部では、実習調査報告書ならびに科学研究費研究成果報告書に掲載された以下のレポートを再録している。
- ・松本幡郎2000「1.伊江島の地質」、『考古学研究室報告』第35集
 - ・当山昌直・平山 廉2000「ナガラ原東貝塚から出土したカメ類について」、『考古学研究室報告』第36集
 - ・宇田津徹朗・藤原宏志2001「ナガラ原東貝塚出土土器および遺跡土壌のプラント・オパール分析」、『考古学研究室報告』第36集
7. ナガラ原東貝塚の発掘調査は、熊本大学考古学研究室による実習調査ならびに科学研究費による共同研究として起案され、沖縄県教育庁文化課と伊江村教育委員会の協力を得て実施された。調査期間と調査面積は以下のとおりである。
- ・第1次調査：1998年7月5日から7月19日（15日）41.81m²
 - ・第2次調査：1999年7月12日から7月26日（15日）77.1m²
 - ・第3次調査：2000年7月27日から8月10日（15日）64.35m²
 - ・第4次調査：2001年7月16日から7月27日（12日）79.05m²
 - ・第5次調査：2002年8月4日から8月15日（12日）102.8m²
 - ・第6次調査：2009年8月15日から8月29日（15日）42.75m²
 - ・第7次調査：2010年8月27日から9月7日（12日）42.75m²
 - ・第8次調査：2011年9月1日から9月14日（14日）42.75m²
8. 発掘調査の参加者は以下の通りである。
- 甲元眞之、木下尚子、小畑弘己、杉井 健（以上熊本大学教員）
 黒住耐二（千葉県立中央博物館）、高宮広土（札幌大学）、樋泉岳二（早稲田大学）、松田順一郎（史跡鴻池新田会所管理事務所）
- 第1次調査（○はフィールドマスター、（ ）内は参加当時の学年、姓は当時のもの）
- 藤江 望、藤木 聡、村崎孝弘（以上大学院1年生）、松嶋木綿子、山崎常美（以上研究生）、石川まどか、緒方智子、鍛冶真理子、亀井菜津子、新里亮人、冨永明子、中川毅人、馬場達也、古野京子、峯崎麻帆、村上浩明、山口大介、以上学部3年生）、荒木隆宏、河合章行、木村龍生、京極佳子、熊本茂仁、高橋久美、竹中克繁、橋口剛士、松根恭子、丸山愛、劉軍（以上学部2年生）
- 第2次調査
- 谷 直子、亀田 学（以上大学院1年生）、緒方智子、新里亮人、中川毅人、村上浩明、山口大介（以上学部4年生）、荒木隆宏、河合章行、木村龍生、京極佳子、熊本茂仁、高橋久美、竹中克繁、橋口剛士、松根恭子、丸山愛、劉軍（以上学部3年生）、内田美穂、菊池義明、坂口三輝子、坂元紀乃、田代理恵、檀 佳克、丸地見典、三浦和之、満留花子、宮田安利子、宮本千恵子、安武寛文、矢羽田幸宏（以上学部2年生）、知念正彦（筑波大学学部4年生）、久高糸子（筑波大学学部1年生）
- 第3次調査
- 新里亮人、中川毅人（以上大学院1年生）、橋口剛士（学部4年生）、内田美穂、菊池義明、坂口三輝子、坂元紀乃、田代理恵、檀 佳克、丸地見典、三浦和之、満留花子、宮本千恵子、安武寛文、矢羽田幸宏（以上学部3年生）、安部茂明、伊福修三、江頭俊介、芝 康次郎、西嶋剛広、前田耕輔、松本周作、村田 勉（以上学部2年生）
- 第4次調査
- 木村龍生、呉 伴錫、緒方智子、河合章行、竹中克繁（以上大学院1年生）、安部茂明、江頭俊介、芝 康次郎、西嶋剛広、前田耕輔、松本周作、村田 勉（以上学部3年生）、上野平優紀、仙波靖子、

中里陽道、中田伸一、仲矢咲紀、前田知聖、村上 彩、望月大輔、(以上学部2年生)、橋本麻子(明治大学卒業生)、名島弥生(慶応義塾大学大学院生)

第5次調査

○檀 佳克、荒木隆宏、橋口剛士、宮本千恵子(以上大学院修士課程1年生)、新里亮人(大学院博士課程1年生)、江頭俊介、芝 康次郎(以上学部4年生)、上野平優紀、仙波靖子、中里陽道、中田伸一、仲矢咲紀、前田知聖、村上 彩、望月大輔、森 幸一郎、安元香名美(以上学部3年生)、青山陽介、老岐尾可奈子、沖 謙介、神川めぐみ、児玉 幹、齋藤伸太郎、三宮慶太、末永浩平、高橋直人、八郷美美、麓 晃、前田真由子、松ヶ野恵(以上学部2年生)、石丸恵利子、久保山啓成(京都大学大学院生)、緑川弥生(慶応義塾大学大学院生)

第6次調査

○高松あゆみ、弘中正芳(以上社会文化科学研究科博士前期課程1年生)、山野ケン陽次郎(社会文化科学研究科博士後期課程1年生)、赤崎 恵、汐除あずさ、柴田 亮、田中麻里子、中原有彩・松尾慎太郎(以上学部3年生)、内海充貴、甲斐 郁、金子真夕、塩谷和音、東 佳苗、平木 琢、宮田翔太郎、安田未来(以上学部2年生)、松本周作(大成エンジニアリング)

第7次調査

○松崎友理(社会文化科学研究科博士前期課程1年生)、弘中正芳(社会文化科学研究科博士前期課程2年生)、山野ケン陽次郎(社会文化科学研究科博士後期課程2年生)、柴田 亮・中原有彩(以上学部4年生)、内海充貴、甲斐 郁、金子真夕、塩谷和音、東 佳苗、平木 琢、宮田翔太郎、安田未来(以上学部3年生)、大塚奈歩、鬼木しおり、志賀健史、留野優平、中谷美由紀、原田孝典、吉田あかり(以上学部2年生)

第8次調査

○柴田 亮(社会文化科学研究科博士前期課程1年生)、金子真夕(学部4年生)、大塚奈歩、鬼木しおり、志賀健史、留野優平、中谷美由紀、原田孝典、吉田あかり(以上学部3年生)、入江由真、岡田有矢、河村美沙、黄 訳民、原 梓、森 拓馬、與嶺友紀也(以上学部2年生)、服部瑞樹(九州大学大学院人文科学府修士課程1年生)、香川将慶(国士館大学文学部3年生)

9. 平成21～24年度科学研究費補助金基盤研究(A)にかかわる共同研究のメンバーは以下のとおりである。(五十音順、敬称略、所属は当時)

安座間充(金武町教育委員会)、石丸恵利子(熊本大学)、小畑弘己(熊本大学)、神谷厚昭(金城町石畳地質研究所)、川口陽子(筑紫野市教育委員会)、河名俊男(琉球大学)、岸本義彦(沖縄石器研究会)、甲元真之(熊本大学)、黒住耐二(千葉県立中央博物館)、新里亮人(伊仙町教育委員会)、新里貴之(鹿児島大学)、杉井 健(熊本大学)、高宮広土(札幌大学)、樋泉岳二(早稲田大学)、中村 愿(北谷町教育委員会)、中村友昭(鹿児島市立ふるさと考古歴史館)、中村直子(鹿児島大学)、中山清美(奄美市教育委員会)、松田順一郎(史跡鴻池新田会管理事務所)、宮城弘樹(名護市教育委員会)、盛本 勲(沖縄県教育庁文化財課)、山崎純男(高麗大学校考古環境研究所)、山野ケン陽次郎(鹿児島大学)

10. 平成21～24年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究課題番号21242027にかかわる経費は以下のとおりである。

平成21年度	直接経費	4,600,000円	間接経費	1,380,000円
平成22年度	直接経費	3,500,000円	間接経費	1,050,000円
平成23年度	直接経費	3,700,000円	間接経費	1,110,000円
平成24年度	直接経費	3,600,000円	間接経費	1,080,000円

11. 本書第I部の執筆者は、以下のとおりである。それぞれの執筆箇所の本文末に姓名を記載した。これ以外の部分については、木下尚子が担当した。

新里亮人：第1章1、2、3
松本幡郎：第1章4
松田順一郎：第4章第1節2、3
與嶺友紀也：第1章第4節1.1.2.
高宮広土：第4章第4節2.1.
樋泉岳二：第4章第4節2.2.1.
当山昌直・平山 廉：第4章第4節2.2.2
宇田津徹朗・藤原宏志：第5章1
鐘ヶ江賢二：第5章2
山崎純男：第5章3

12. 本書の作成にあたり、河村美沙、黄 訳民、森 拓馬、山本瞭平、與嶺友紀也の各氏の協力を得た。
13. 本書の編集は、谷 直子（第2次調査フィールドマスター）、新里亮人（第3次調査フィールドマスター）、安田未来（第6次・第7次調査参加者）、柴田 亮（第8次調査フィールドマスター）の協力を得て、木下がおこなった。

本文目次

序文
例言

第 I 部 報告編

第 1 章 位置と環境	1
1. 伊江島の概況	1
2. 地理的位置と自然環境	1
3. 歴史的環境	5
4. 伊江島の地質	8
5. 遺跡の立地	13
第 2 章 調査に至る経緯と目的	15
1. 調査に至る経緯	15
2. 調査目的	15
第 3 章 年次ごとの調査経過と成果の概要	17
1. 調査区の設定	17
2. 第 1 次調査 (1998 年) の経過と成果の概要	17
3. 第 2 次調査 (1999 年) の経過と成果の概要	21
4. 第 3 次調査 (2000 年) の経過と成果の概要	22
5. 第 4 次調査 (2001 年) の経過と成果の概要	26
6. 第 5 次調査 (2002 年) の経過と成果の概要	27
7. 第 6 次調査 (2009 年) の経過と成果の概要	30
8. 第 7 次調査 (2010 年) の経過と成果の概要	33
9. 第 8 次調査 (2011 年) の経過と成果の概要	36
第 4 章 調査成果	38
第 1 節 層序	38
1. 考古学的記述	38
2. 堆積学的記述	43
3. 堆積学的所見	46
4. 層序の形成	47
5. 文化層の広がり	47
第 2 節 遺構	51
1. 遺構の概要	51
2. 炉址	51
3. 炭化物を含む黒色砂の広がり	51
4. ピット	53

5. 立位シャコガイ	56
6. 水磨シャコガイ	56
7. 小結	60
第3節 遺物の出土状況	62
1. IV層における出土状況	62
2. V層における出土状況	71
3. V / VII層における出土状況	72
4. VII層における出土状況	73
5. 小結	73
第4節 出土遺物	77
1. 人工遺物	77
1.1. 土器	77
1.1.1. 土器の概要	77
1.1.2. 北1西1グリッドIV層出土未報告資料等	77
1.1.3. 外来要素をもつ土器	80
1.1.4. 貝塚後期土器の検討	102
1.2. 土製品	105
1.3. 石器	105
1.3.1. 石器の概要	105
1.3.2. 石器石材	106
1.3.3. クガニイシ形石器	106
1.4. 貝製品	125
1.4.1. 貝製品の概要	125
1.4.2. 有孔貝製品	126
1.4.3. ヤコウガイ製品	127
1.4.4. ゴホウラ・アツソデガイ製品	137
1.4.5. 貝符	142
1.4.6. オオツタノハ製品	144
1.4.7. 小玉	144
1.5. 骨製品	145
1.6. 鉄製品	145
1.6.1. 出土鉄製品	145
1.6.2. 琉球列島における鉄製品の出土傾向	147
1.6.3. 刀子を通して見た貝塚後期の琉球列島と古墳時代の九州	150
2. 自然遺物	153
2.1. 植物遺体	153
2.2. 脊椎動物遺体	159
2.2.1. 脊椎動物	159
2.2.2. カメ類	176
2.3. 貝類遺体	179

2.3.1. 出土貝類の概要	179
2.3.2. 貝殻の破損痕跡	181
2.3.3. シャコガイの大きさの変化	183
2.3.4. シャコガイの合弁	183
第5章 土器および遺跡土壌の分析	186
1. 土器および遺跡土壌のプラントオパール分析	186
2. 土器の岩石学的分析	193
3. 土器の圧痕分析	207
第6章 炭素14年代測定	210
1. 測定資料	210
2. 文化層の絶対年代比定	217
3. 結語	218
第7章 総括	220

第Ⅱ部 考察編

1. 沖縄諸島土器編年におけるナガラ原東貝塚の土器	宮城弘樹・安座間充… 231
2. ナガラ原東貝塚出土のスセン當式類似土器について	新里貴之… 248
3. ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ	中村直子… 259
4. 石器等から見たナガラ原東貝塚の様相－石器・石材の供給地推定－	岸本義彦・神谷厚昭… 269
5. ナガラ原東貝塚出土貝符の編年的位置づけ	山野ケン陽次郎… 278
6. 古墳築造域と琉球列島間におけるゴホウラ背面鋤の流通について	中村友昭… 295
7. ナガラ原東貝塚出土ゴホウラ背面貝輪片について	川口陽子… 309
8. 南島中部圏先史時代遺跡出土の植物遺体	高宮広土… 317
9. 脊椎動物遺体からみたナガラ原東貝塚における古環境と動物資源利用	樋泉岳二… 326
10. ナガラ原東貝塚における動物資源の調理と廃棄	石丸恵利子・村田知聖… 331

11. ナガラ原東貝塚の貝類遺体	黒住耐二… 340
12. 伊江島における伝統的漁撈技術と考古資料の比較検討	盛本 勲… 363
13. ナガラ原東貝塚の堆積物	松田順一郎… 377

第Ⅲ部 総括編

編集後記	389
------	-----

図目次 (第Ⅰ部)

図1 伊江島地形図 (国土地理院2万5千分の1地図)	1
図2 琉球列島位置図	2
図3 伊江島位置図	3
図4 伊江島周辺の地質図	4
図5 伊江島の遺跡分布図	6
図6 伊江島の地形と遺跡立地の関係	7
図7 伊江島周辺の海底地形図	9
図8 伊江島北海岸崖面スケッチ	10
図9 伊江島の基盤地質想定図と地質断面図	11
図10 琉球石灰岩の基底面	12
図11 遺跡の立地	14
図12 調査区周辺地形および調査区位置図	18
図13 調査区の名称	19
図14 第1次調査(1998年)発掘調査区と土層断面図	20
図15 第1次調査コラムサンプリング位置図	21
図16 第2次調査(1999年)発掘調査区	22
図17 第2次調査コラムサンプリング位置図	23
図18 第3次調査(2000年)発掘調査区	24
図19 第3次調査コラムサンプリング位置図	24
図20 第4次調査(2001年)発掘調査区	26
図21 第4次調査コラムサンプリング位置図	26
図22 第5次調査(2002年)発掘調査区	28
図23 第5次調査コラムサンプリング位置図	29
図24 第6次～8次調査(2009年～2011年)発掘調査区	30
図25 第6次調査コラムサンプリング位置図	31
図26 第7次調査コラムサンプリング位置図	33

図27	第8次調査コラムサンプリング位置図	36
図28	土層断面図作成箇所 (①~⑳)	38
図29	発掘区の層序 (南北ライン) 1	39
図30	発掘区の層序 (南北ライン) 2	40
図31	発掘区の層序 (東西ライン) 1	41
図32	発掘区の層序 (東西ライン) 2	42
図33	北1西1グリッドの堆積層・土層はぎ取り資料1 (2009年)	44
図34	北1西1グリッドの堆積層・土層はぎ取り資料2 (2009年)	45
図35	推定されるⅢ層の広がり	48
図36	推定されるⅣ層の広がり	49
図37	推定されるⅤ層の広がり	50
図38	炉址	51
図39	Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅴ/Ⅶ層の遺構 (炉址・ピットなど)	52
図40	遺構図 (北1西1グリッド Ⅴ層・Ⅴ/Ⅶ層)	53
図41	立位シャコガイ18	55
図42	立位シャコガイ7・22・26~30	57
図43	水磨をうけたシャコガイの大きさとグリッド別出土頻度 (n:203)	58
図44	Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅴ/Ⅶ層出土の水磨シャコガイ	59
図45	水磨シャコガイの分布 (Ⅳ層)	60
図46	土器の出土分布 (Ⅳ層)	63
図47	石器・貝製品・鉄製品の出土分布 (Ⅳ層)	64
図48	シャコガイの出土分布 (Ⅳ層)	65
図49	合弁出土の出土分布 (Ⅳ層)	66
図50	シャコガイの合弁からみた分布の関係	67
図51	マガキガイの出土分布 (Ⅳ層)	68
図52	ニシキウズガイ科貝類の出土分布 (Ⅳ層)	69
図53	レイシ類・オニツノガイ・チョウセンサザエ等の出土分布 (Ⅳ層)	70
図54	獣骨・魚骨の出土分布 (Ⅳ層)	71
図55	土器の出土分布 (Ⅴ層)	72
図56	石器・貝製品・黒曜石の出土分布 (Ⅴ層)	72
図57	シャコガイの出土分布 (Ⅴ層)	73
図58	マガキガイの出土分布 (Ⅴ層)	73
図59	ニシキウズガイ科貝類の出土分布 (Ⅴ層)	74
図60	レイシ類・オニツノガイ・チョウセンサザエ等の出土分布 (Ⅴ層)	74
図61	獣骨・魚骨の出土分布 (Ⅴ層)	75
図62	遺物の出土分布 (Ⅴ/Ⅶ層)	76
図63	遺物の出土状況 (Ⅶ層)	75
図64	第1次調査出土土器・土製品実測図 (1) (2) (3)	78~80
図65	第2次調査出土土器実測図 (1) (2) (3)	82~85
図66	第3次調査出土土器実測図 (1) (2)	86~87

図67	第4次調査出土土器実測図(1)(2).....	89~90
図68	第5次調査出土土器実測図(1)(2).....	92~93
図69	第6次調査出土土器実測図(1)(2).....	95~96
図70	第7次調査出土土器実測図(1)(2).....	98~99
図71	第8次調査出土土器実測図(1)(2).....	100~101
図72	土器の口唇部刻目・口縁部断面形状・底部形状の分類.....	103
図73	貝塚後期土器の分析.....	104
図74	第1次調査出土有孔土製品実測図.....	105
図75	第1次調査出土石器実測図(1)(2).....	107~108
図76	第2次調査出土石器実測図(1)(2).....	109~110
図77	第3次調査出土石器実測図(1)(2).....	111~112
図78	第4次調査出土石器実測図.....	113
図79	第5次調査出土石器実測図(1)(2).....	114~115
図80	第6次調査出土石器実測図(1)(2)(3).....	115~117
図81	第7次調査出土石器実測図.....	117
図82	第8次調査出土石器実測図.....	118~119
図83	石器の構成比の変化.....	106
図84	石材産地別にみた製品・石材・剥片の構成.....	106
図85	クガニイシ形石器出土遺跡.....	121
図86	クガニイシ形石器の出土傾向.....	122
図87	貝製品の構成比の変化.....	125
図88	第1次調査出土貝製品実測図(1)(2)(3)(4).....	130~133
図89	第2次調査出土貝製品実測図.....	134
図90	第3次調査出土貝製品実測図.....	135
図91	第4次調査出土貝製品実測図(1)(2).....	136~137
図92	第5次調査出土貝製品実測図(1)(2).....	138~139
図93	第6次調査出土貝製品実測図.....	140
図94	第7次・第8次調査出土貝製品実測図.....	141
図95	第3次・第6次・第8次調査出土貝符実測図.....	141
図96	有孔貝製品の大きさの分布.....	126
図97	有孔貝製品の重さの分布.....	127
図98	有孔貝製品の素材貝構成比の変化.....	127
図99	オオツタノハ腕輪出土遺跡分布図.....	142
図100	出土骨製品実測図.....	146
図101	出土鉄製品実測図・写真.....	146
図102	九州島における刀子出土古墳数(5~7世紀).....	150
図103	九州島における刀子・南海産貝類製品出土古墳数(5~7世紀).....	150
図104	刀子を伴う古墳が南海産貝製品をもつ確率.....	150
図105	脊椎動物遺体(ピックアップ資料)の層位別出土数(NISP).....	167
図106	脊椎動物遺体(ピックアップ資料)の組成.....	168

図107	脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の層位別組成（NISP比）	168
図108	魚類遺体（ピックアップ資料）の組成	168
図109	魚類遺体（ピックアップ資料）の層位別組成（NISP比）	168
図110	脊椎動物遺体分析試料の採取位置	171
図111	水洗選別によって検出された魚類遺体の層位別組成（NISP比）	172
図112	単一の柱状サンプル（TT09～TT11）における魚骨組成の層位変化（NISP比）	172
図113-1	リュウキュウヤマガメの背甲の骨板と甲板	177
図113-2	リュウキュウヤマガメの外側からみた腹甲の骨板と甲板	177
図114	食用貝類の貝殻の破損	181
図115	シラナミ類の殻径分布（n：1948）	182
図116	ヒメジャコの殻径分布（n：1005）	182
図117	合弁シャコガイの距離	183
図118	出土シャコガイと合弁シャコガイの関係	184
図119	分析土壌の採取位置（北3西1グリッド）	190
図120	分析土壌の採取位置（北2東1グリッド）	190
図121	分析を行った土器（右：切断前 左：切断後）	191
図122	検出されたプラント・オパール	191
図123	プラント・オパール定量分析結果（北3西1グリッド）	192
図124	プラント・オパール定量分析結果（北2東1グリッド）	192
図125	土器の鉱物組成	195
図126	土器の粒径分布	198
図127	偏光顕微鏡写真（スケール約1.0mm）	201～206
図128	ナガラ原東貝塚出土土器の圧痕のSEM写真Ⅰ	207
図129	ナガラ原東貝塚出土土器の圧痕のSEM写真Ⅱ	208
図130	ナガラ原東貝塚出土土器上のリュウキュウミニナ圧痕	208
図131	炭素14年代測定結果（①～⑱）	212～214
図132	試料⑱の採取位置	214
図133	ナガラ原東貝塚炭素14年代一覧	215
図134	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の炭素14年代	216
図135	Ⅳ層の炭素14年代	217

表目次（第Ⅰ部）

表1	伊江島の遺跡一覧	7
表2	伊江島の地形と植生の関係	7
表3	調査基準点および2009年新設点の国土座標	13
表4	第7次調査によるシャコガイと木炭の ¹⁴ C年代測定	35
表5	年次調査と調査区	37
表6	北1西1グリッド検出ピット一覧	53

表7	立位シャコガイ一覧	54
表8	水磨をうけたシャコガイ一覧	58
表9	水磨をうけたシャコガイ一覧(層別)	58
表10	遺構ならびに遺構関係遺物(層別)	60
表11	貝塚時代後期の掘立柱建物跡	61
表12	ナガラ原東貝塚出土土器統計(破片数)	77
表13	第1次調査出土土器観察表	81
表14	第2次調査出土土器観察表(1)(2)	85
表15	第3次調査出土土器観察表	88
表16	第4次調査出土土器観察表	91
表17	第5次調査出土土器観察表	94
表18	第6次調査出土土器観察表	97
表19	第7次調査出土土器観察表	99
表20	第8次調査出土土器観察表	101
表21	出土石器の概要	105
表22	出土石器計測値等一覧	120
表23	クガニイシ形石器の大きさ比較(平均値)	122
表24	クガニイシ形石器出土遺跡遺跡一覧	123
表25	出土貝製品の概要	125
表26	出土貝製品一覧	126
表27	有孔貝製品計測表	128
表28	ゴホウラ・アツソデガイ加工品出土一覧	139
表29	オオツタノハ腕輪出土遺跡一覧(琉球列島)	143
表30	奄美諸島・沖縄諸島における鉄製品および製鉄関連遺物出土一覧(12世紀以前)	147
表31	九州島における刀子ならびに南海産貝類製品出土古墳一覧	151
表32	ウォーターフローテーションにより検出した植物遺体一覧	153
表33	ウォーターフローテーションによる植物遺体(1998年)	153
表34	ウォーターフローテーションによる植物遺体(1999年)IV層	154
表35	ウォーターフローテーションによる植物遺体(2000年)	155
表36	ウォーターフローテーションによる植物遺体(2001年)IV層	156
表37	ウォーターフローテーションによる植物遺体(2002年)北1西1グリッド	158
表38	ウォーターフローテーションによる植物遺体(2009年)北1西1グリッドV層	159
表39	採集された脊椎動物遺体の種名一覧	159
表40	ピックアップ資料の同定結果	160~163
表41	ピックアップ資料のイノシシ上顎骨・遊離歯の詳細	165
表42	ピックアップ資料のイノシシ下顎骨・遊離歯の詳細	165
表43	ピックアップ資料の組成	167
表44	採取した水洗選別用堆積物試料	169~170
表45	水洗選別によって検出された脊椎動物遺体の組成(NISP)	173
表46	水洗選別試料における動物遺体の包含密度と焼骨率	174

表47	層別出土貝類集計（ピックアップ資料）	180
表48	分析に用いた土器	186
表49	プラント・オパール定量分析結果（北3西1グリッド）	187
表50	プラント・オパール定量分析結果（北2東1グリッド）	188
表51	プラント・オパールを含む土器胎土分析の結果	189
表52	土器（サンプル2）から検出されたプラント・オパール密度	189
表53	分析に用いた土器	194
表54	土器胎土の岩石学的分類	196
表55	炭素14年代測定値一覧（半減期：5568）	211